昭和51年5月9日第三種郵便物認可　昭和61年4月1日発行（毎月一回1日発行）　ISSN 0385-5457

HIMALAYA

ヒマラヤ

No. 173

1986 APRIL

日本ヒマラヤ協会
THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN——HAJ

〈特別企画〉

中国の秘境「九寨沟」「黄龍寺溪谷」の旅

― 四川省・岷山山脈麓トレッキング ―

「九寨沟」「黄龍寺溪谷」は、四川省北部に、甘粛省との境を成す岷山山脈の麓にある、中国でも第一級の景勝地です。無数に存在する真青な湖と真白な滝が美しい調和を見せる「九寨沟」、水の流れが長い年月をかけて造りだした自然の芸術品「黄龍寺溪谷」は、これまで外国人には未開放の地でしたが、86年にＨＡＪのために特別開放されることになりました。トレッキングの基地となる町「松藩」の歴史は古く、春秋時代に溯ると言われています。歴史的にも興味のあるところです。

▲九寨沟の滝

1. 時　期　　1986年７月25日(金)～８月10日(日) 17日間
2. 定　員　　15名
3. 費　用　　約60万円
4. 行動概要　北京 ― 成都 ― 松藩

　トレッキングは、松藩を基地として九寨沟黄龍寺溪谷へ、それぞれ往復２～３日の行程です。四川省登山協会、松藩体育委員会のメンバーとの親睦会も予定しています。

　北京－成都間は、往路あるいは復路に鉄道の旅を予定しています。

▲黄龍寺、自然の芸術品

表紙写真

ヒスパー山群の北西部に位置する秀峰トリヴォール（7,728ｍ）は、モムヒル氷河源頭を隔てて、いつも我々の背後に聳えていた。

1960年、W. ノイスら８人の英国隊は、反対側のガレサ谷をアプローチにとり、写真右の稜線から初登頂した。

（東京志岳会マラングッティ・サール登山隊）

ヒマラヤ No.173

1. ヒマラヤ放談 ―――― W・クルティカ、R・シャウアー

5. インドヒマラヤの現状と将来の展望 ―― N. D. ジャイアル

10. ヒマラヤ・ニュース＜地域ニュース・インフォメーション＞

12. カラコルムの山旅 ――――
――――― 東京志岳会マラングッティ・サール登山隊１９８５年

22. １９８５年パキスタン登山隊の結果と遭難事故

24. 事務局日誌・寸感

ヒマラヤ放談

K2登山も終盤をむかえたある日、標高5,500mのHAJ隊ベース・キャンプを2人の客人が訪れた。ガッシャブルム4峰西壁を登った後K2南東稜へ転進してきた、ポーランドのヴォイテク・クルティカ（Wojciech Kurtyka）とオーストリアのロベルト・シャウアー（Robert Schauer）である。その後、HAJ隊の第2次アタック隊と時を同じくして7,400mまで登った彼らは、悪天の兆にいち早く引き返し、再び我々のベース・キャンプを訪ねて、残っていたHAJメンバーと夜遅くまで語り合った。昨年8月3日夜のことである。

久し振りのヒマラヤ放談は、その時の2人の話をまとめてみた。

K2は「高さ」に価値がある

―― お疲れ様。あっさりと撤退されましたが、再トライは？

W.K. 天候次第ですけど、今回はK2には執着してません。G4の疲れが残っていますし、いまはとにかくベースでたくさん食べてゆっくり休みたいですね。

―― パキスタン観光省では、今年K2南東稜（アブルッツィ稜）にはいるのは我々日本隊とスイス隊、そしてフランス隊の3隊だけと聞いたんですが、あなた方はいつ許可をとられたんですか？

W.K. 実は、我々の許可は東壁だったんです。しかし、G4西壁を登って、疲れた身体でK2の新ルートに挑むのは時間もかかるし、またそんな体力も残っていないので、連絡官の了解をとってアブルッツィ稜に変更したのです。

―― しかし、アブルッツィ稜は、すでにロープが張られていますし、例えばG4西壁なんかと比べると、あなた方にとってはあまり興味あるルートではないんじゃないですか。

W.K. 東壁を登るのとは全く異質のものですが、K2の場合には8,611mという高さが一つの意味を持っていますから……。実は、私は76年にも来たんです。その時は大部隊で、ルートは北東稜でしたが、登れませんでした。機会があればまた来たいですね。

―― シャウアーさんは79年のメスナー隊に参加されているんですね。

R.S. うん、あの時は、南壁を予定していたのをアブルッツィ稜に変更して、私自身は8,000mの第4キャンプまで3度登ったんだけど、そのたびに悪天候で引き返したんだ。ちょうど今回のようにね。現在の私のクライミングは「技術的な困難性」に向けられているけど、それでもエベレストとK2は別だ。その「高さ」だけのために登られる価値がある。日本で一番高い富士山は、技術的には易しいと聞いているが、ハードな山登りをやっている連中でも一度は登りたがるのと同じだよ。メスナーも登っているだろ！（笑）

充実したG4西壁の登攀

―― G4西壁は如何でしたか。

W.K. すばらしい登攀でした。通称「シャイニング・ウォール」と呼ばれ、バルトロ氷河を遡って来ると正面に眺められる美しい壁です。そこに新らしいラインを引くことを、ロベルトも私も長い間憧れていました。76年にこの壁を見たとき、K2よりも魅力を感じました。我々は、壁の右寄りのアイスガリーに取っ付き、クーロワール添いに150mほど快適に登り、それから岩壁帯になって、これを左上気味に登って、上部でまたアイスガリーにはいって、頂稜に出ました。でも、今回は、我々の望みどうり壁は登りましたが、頂上には立っていません。

R.S. バルトロ側から見るとG4の頂上は台形状になっていて、右（南）の角が最高点7,925mなんだけど、我々が抜け出たところは左（北）の角で、そこから頂上を往復するには、ほぼ水平なんだけど、雪が深くって、丸1日かかると思ったので、

▼W. クルティカ

断念して北稜を下降したんだ。

W.K. 我々は最初4～5日で登れると考えて、4日分の食料と5日分の燃料しか持って行きませんでした。しかし、予想していた以上に壁の状態が悪く、また悪天につかまったりして、結局登りに8日と下降に3日、あわせて11日もかかってしまいました。

R.S. 岩は、ほとんど石灰質で、非常に美しい大理石の部分もあった。クラックはいっぱいあるんだけど、しっかりしてなくて、手にした岩がぼろぼろとはがれるんだよ。プロテクションがとれなくて参ったね。8㎜径の80mロープを使ったんだけど、シングルでいっぱいにのばしたことがあった。途中ノープロテクションでね。60mくらいはちょくちょくあったな。

―― 登攀具はどんなものを用意されたんですか。

W.K. ロック・ピトンは15本、うち4～5本は回収できませんでした。それからアイス・ピトン3本、カラビナ10枚といったところですか。極力少なくして軽量化をはかりました。

R.S. それからストッパーを5～6コ。でもほとんど使えなかった。岩がルーズで、ストッパーをセットして荷重をかけるとクラックが広がるんだよ。ズ、ズ、ズ……とね（笑）。

―― 壁でのビヴァークはどうでしたか。

W.K. とても快適とは言えないところばかりでした。2人が別々の場所で、ちょっと腰をおろしただけで、背中をもたれかけることもできなかったり、上部で悪天になったときには、ひっきりなしにチリ雪崩を受けたり、ほとんど眠れないビヴァークばかりでした。

R.S. 5日目からは飢えと渇き、そして眠気との闘いだったね。2人共、幻聴や幻覚に悩まされた。

2人とも100%のクライミング人生

―― それぞれ、簡単に自己紹介していただけますか。

W.K. 私は、現在38歳で、特にこれといった定職は持っていません。このところ毎年ヒマラヤ登山をしていますので、ポーランドへ帰ると講演をしたり、執筆をしたりしています。プロと言えないこともないですね。山登りを始めたのは比較的遅くて、23歳のときです。ロック・クライミングから始めました。ポーランドにはタトラ山群というのがあって、600～800mの岩壁に良いルートが沢山開かれており、そこを登っていました。冬期登攀もやりました。それがヒマラヤのための良いトレーニングになったと思います。最初の遠征は1972年、25歳のときで、ヒンズー・クシュのアカチョー北壁をアルパイン・スタイルで登りました。それから、74年に冬期ローツェ、76年にK2北東稜へ、大人数による伝統的なやり方の登山隊に参加しました。どちらも失敗しました。2つとも、私自身あまり満足できませんでしたし、それらは本当の意味での登山とは違うような気がしました。以後はすべて少人数によるアルパイン・スタイルです。コー・イ・バンダカー北東壁やダウラギリ東壁、ガッシャブルム1峰～2峰縦走、ブロード・ピーク三山縦走などです。これらはすべて満足のゆく面白い登山でした。

R.S. 私は31歳。高校を出たあと医科大学に6年間通ったんだけど登山に没頭するようになって、結局医者になるのをあきらめてプロのクライマーの道を選んだんだ。現在は登山やスキー用具メーカーのテクニカル・アドバイザーをしている。有名なところでは靴のコフラックやスキーのアトミック、チロリア、その他にもいくつかの運動具メーカーと契約している。それから、たまには講演をしたりもする。最近は山岳映画の制作もやるんだ。山を始めたのは16歳で、高校生のときだった。主にアルプスの壁を登っていた。 最初の遠征は1974年で、カラコルムのプマリ・キッシュを目指したんだが、ヤズギル氷河の状態が悪くて、結局その近くの6,500m の無名峰に登った。このとき私はユクシン・ガルダン・サールの美しさに魅せられ

て、その後何度か登山申請をしたんだが、いつも日本隊に先を越されてしまった。74年からはほとんど毎年ヒマラヤへ来ている。75年はガッシャブルム1峰、76年ナンガ・パルバット、77年クン、78年エベレスト、79年K2、81年マカルー、82年アンナプルナ2峰、83年カラン・クー、84年ブロード・ピーク……。エベレストとK2は大部隊の遠征だったが、それ以外は小さいものばかりだ。印象に残っているクライミングは、一つは76年のナンガ・パルバット。南西稜の新ルートを、ハンス・シェル隊長をはじめ4人のメンバーが全員登頂した。このときは、まず7,000mまで登って荷を置き一旦下降、その後7,000mからワン・プッシュ、というセミ・アルパイン・スタイルで、8,000mでシュラフなしのビヴァークを体験した。それから、個人的に満足度の大きかったのは81年のマカルー。オリジナル・ルートだったが、7,300mからは1人で頂上まで登った。それと今回のG4峰。いままでで一番中身の濃い登攀だった。

―― お2人ともすごいですね。ご家族は？

W.K. 一度結婚しましたが別れました。一人じゃなきゃ、現在のようなクライミング中心の生活は難しいですね。

R.S. 私も同じく、いまは独身だ。（笑）

強いポーランドのクライマー

―― クルティカさん、ポーランドの登山界について聞かせてください。

W.K. ポーランドには20くらいの山岳会があって、山登りをする人は皆どこかに所属しています。各会のメンバーはだいたい100人から500人で、登山人口はポーランド全体でも8,000人くらいでしょうか。その中で、ヒマラヤの8,000m峰などに遠征するようなクライマーは50人から100人くらいです。このところ毎年3～5隊が出ています。

―― 我々は、ポーランドのクライマーというのは非常に強いという印象を持っているんですが、どう思われますか。

W.K. ざっと思い浮かべるだけでも、10人くらいは非常に強いクライマーがいます。ほとんど無名ですが、そのうちの5～6人はたぶんメスナーより強いでしょう。例えばイェジ・ククチカ。私は3回遠征を共にしました。81年のマカルー、83年のG1～G2縦走、84年のブロード・ピーク縦走です。マカルーでは、風が強くて他の誰も登ろうとしませんでしたが、ククチカだけが一人で頂上を往復しました。彼は現在10の8,000m峰に登っています。昨冬は、ダウラギリの頂上からの下降中強風の中でテントもシュラフもなく2晩ビヴァークしながら下山、すぐに別のポーランド隊がはいっていたチョー・オユーへ向かい、長いキャラバンを飛ばして、ベースへ着いた翌日から登攀を開始、これもまたビヴァークをしながら登頂してしまったのです。まさに「カミカゼ」です。（笑）私は、ここしばらく英国のクライマー、アレックス・マッキンタイアやジョン・ポーターなどと一緒に登っていまして、感じたことは、ポーランド人はいつでも、何をするにしても必死になる、ということですね。ですから、ポーランドのクライマーが強いというのは、たぶん精神面での強さだと思うんですが、それはポーランドという国が2つの強い国、つまりロシアとドイツにはさまれて、常に抑圧を受けてきたという歴史の中ではぐくまれた、国民の気質と言うべきでしょう。ポーランド人は長い間自由に対する強い欲求を持っていて、それはそれらの強い国に対する抵抗心となり、この反抗精神が何か事にあたる際の卓越した集中力とか粘り強さになっているのだと思います。

―― それから、ポーランドというとやはりヒマラヤの冬期登山に先鞭をつけたという印象が強いですね。

W.K. より困難な条件に挑戦する、というのはクライマーにとって自然の欲求だと思います。我々はタトラやアルプスで冬期登攀をやっているんですから、ヒマラヤを特別に考えることはない、と

▲R・シャウアー

いう発想です。私も同じ考えです。80年のエベレストのときは、実は私も誘われたのですが、その頃すでに大きな隊には興味がなかったので、参加しませんでした。あのときのメンバーは全員知っています。強いチームでした。ただ、登頂が2月17日だったということで、ネパール政府は冬期とは認めませんでした。

―― 我々は認めています。実質的には明らかに厳冬期ですよ。

W.K. そうです。しかしネパール政府はメスナーに大きく影響されています。メスナーは認めませんでした。というのは、彼には冬のチョー・オユーに挑む計画があって、何としても8,000m峰の冬期初登頂者という名誉が欲しかったので、ポーランド隊のエベレスト登頂を冬期とはみなしたくなかったんです。

―― メスナーについてはどう思われますか。

R.S. マスコミを利用することが非常にうまいね。79年のK2で思ったことは、彼は常に自分の損得だけを考えて行動している、ということだ。二度と一緒に行きたいとは思わないね。

W.K. 登山家として他の誰よりもずば抜けて有名ですし、確かに山登りと縁のうすい一般の人たちにヒマラヤ登山を知らしめたという意味では偉大だと思います。でも彼の登り方はクライマーとしては納得できません。私は常々思っているんですが、ヒマラヤ登山は3つの困難な要素を含んでいます。それは①高度、②技術、③危険です。アルプスではすでに各ルートのグレードづけがかなり正確にできていますが、それはいま言ったうちの②－技術的な困難性－を示すものとして5級とか6級とつけられている訳ですね。で、仮にヒマラヤにおいてグレードづけを試みた場合、当然ながら②だけでは不十分で、ヒマラヤの特徴といえる高度の困難性、つまり高所において活動するという体力的な苦しさ、そして地形的な危険性をも考慮する必要があります。ですから、ヒマラヤでのクライミングを評価する場合、3次元的なグレード、つまり①が何級、②が何級、③が何級という表現になるんですけれど、まあ現実には難しいんですが、それでもそのルートを登ったり見たことのあるクライマーの意見を総合すると大体の難度がわかるわけです。しかしメスナーは①の要素だけを追求しているんです。②とか③の要素はむしろできるだけ困難を避けています。それでは本当のクライマーとは言えません。ただ体力を誇示しているに過ぎないのです。

技術的な困難を求めて

―― お2人とも毎年のようにヒマラヤへ出かけられていますから、いろいろなところで日本隊を見られると思います。日本人の印象はどうですか。

W.K. 毎年多くの日本隊がヒマラヤに登っていますが、ほとんどが大遠征ですね。日本人のアルパイン・スタイルによる登攀をほとんど聞かないのは不思議です。

R.S. ある日本人がこう言うのを聞いたことがある。日本にはアルプスのように氷河を持った山がないのでトレーニングの場がない、とね。でも、私は、日本人がアルプスにもよく行くことを知っている。彼らはヒマラヤのためのトレーニングのつもりで行くのかい？

―― いえ、現在ではほとんどそういうことはないですね。アルプスへ行く人はそれが目的で行きますし、ヒマラヤが目的の人は日本でトレーニングして直接ヒマラヤへ行きます。

R.S. じゃあ、アルプスでもヒマラヤでも同じことで、日本で登っている人がアルプスへ行ってむこうのスタイルで登っているのだから、日本からヒマラヤへダイレクトに行っても同じように登ればいいじゃないか。

―― これからはどんなヒマラヤ登山を目指されるんですか。

W.K. やはり、少人数ですっきりした登り方、つまりアルパイン・スタイルで、内容の濃いクライミングをやりたいですね。具体的にはトランゴ岩塔群辺りの新ルートを登ってみたいですね。

R.S. 私もそうだ。特に、技術的に困難なロック・クライミングをやりたいね。トランゴ・タワー やウリ・ビアホのような素晴らしい岩壁の、全くの新ルートをワン・プッシュで登りたいな。

―― 今日はお疲れのところ、どうもありがとうございました。

（インタビュー：HAJK2登山隊　構成：吉田憲司）

〈インドヒマラヤ会議1986・特別講演〉

インドヒマラヤの現状と将来の展望

═══ 登山者とトレッカーのために ═══

N. D. ジャイアル

はじめに

まず最初に、今回の東京での「インドヒマラヤ会議」にお招きいただいたことを、インド登山財団（ＩＭＦ）を代表してお礼申し上げます。同時にまた、私にとっては初めての訪問ですが、ＩＭＦの代表としてこのすばらしい国日本に来られたことを誇りに思います。実際、日本の皆さんは何をするにしても勤勉で、美的感覚に優れ、そして冒険心が旺盛です。私は、ですから、この度この歴史ある日本を訪れその文明に接することができるのを大変嬉しく、また光栄に思います。巡礼者あるいは学生になったつもりで、日本特有の文化や自然をじっくりと見て帰りたいと思います。

インドヒマラヤへの登山隊

インドの独立以来、インドヒマラヤにおける登山活動は急激に活発になり、世界中のあらゆるところから登山隊がやって来ました。その中でヒマラヤ登山史上最初に目ざましい実績をあげたのは日本隊でした。1968年に最初の隊（訳註：インド独立後の最初）がインドヒマラヤを訪れて以来、1985年までに、実に195の登山隊が日本から来ています。そのうちの４隊は日印合同隊です。それらはもちろん成功した隊も、また残念ながら失敗した隊もありますが、他の外国隊と比較すると日本隊は少し違っています。それは、まず計画がしっかりしているということ、それから隊の統制がとれていること、そしてインド政府の規則やＩＭＦの要請をきちんと守るということです。ヒマラヤへ来られる登山者を通して、道徳心の深い日本人の国民性やその文化に触れ、私たちは豊かな気分になったものです。日本とインドの合同遠征は、私たちが最もその成果を期待しているもので、それらの経験をもとにあらゆる分野における両国間の相互協力が発展すると考えます。ですから、私たちは、これからもますますこのような合同遠征が多くなることを歓迎します。それは、ただお互いの登山技術を磨くだけでなく、両国民間の永続的な友好関係を築きあげることにもなるのです。

1985年の登山隊を振り返って

昨1985年の登山シーズンには62の外国隊がインドヒマラヤを訪れ、16が日本隊でした。そのうちの1隊は注目すべき成功をおさめた日印合同サセル・カンリⅡ峰登山隊です。そしてまた2隊は女性隊で、1隊はメントーサに、もう1隊はハヌマン・ティバに挑み、どちらも成功しました。16の日本隊のうち11隊が成功して頂上に立ち、5隊はできませんでした。日本隊にしろインド隊にしろ、ここ数年間のうちに、かつては男性しか行かなかったところに女性だけが力を合わせて挑戦するようになり、立派な成果をあげていることは、非常に喜ばしいことです。たいへん悲しいことに、2人の日本人横川幸司氏と斉藤茂樹氏が、それぞれテレイ・サガールとケダルナートで亡くなられました。謹しんで哀悼の意を表します。

1986年日本隊の計画

ＩＭＦは、現在、11隊からの申請書を受理しています。その内訳は、3隊がガルワール、6隊がカシミール、そして2隊がヒマチャル・プラデッシュです。このうち1隊はキンナール地域の中央に聳える美しい峰キンナール・カイラスを目差す日印女子合同隊です。私は、この地方の行政官として務めていた7年間、いつも自分の家からこの峰を眺めて憧れていたものです。私たちは、この画期的な遠征の成功を心から祈っています。

ＩＭＦは、どの日本隊も定められた書類を細部にわたってきちんと作成していることに対して、非常に好感をもっています。また、日本隊のメンバーは礼儀正しく行儀が良いのが一般的です。ただ、ときどき、隊の到着を実際の入山よりも2週間も3週間も前に予定して計画書に記される隊があります。もちろん、いつインドへ来られるかは皆さんの都合の良いときで構いませんが、リエゾン・オフィサーの手配が問題になることがたまにあります。リエゾン・オフィサーを志願する人たちは、それぞれ自分の仕事を持っていて、1ケ月かそこらしか休暇がとれませんので、隊が入山する2～3日前より以前に合流することは無理なのです。

インドヒマラヤの登山規制

わが国のヒマラヤにおける国境地域は、未だ非常に微妙な立場にあります。それぞれの隣国との友好条約が結ばれるまでは、現在のインナーライン規制はそのまま継続されるでしょう。しかしここ数年、地域によっては緊張が緩和しており、開放の方向へ変化しつつあります。そのような地域には、まずインドとの合同隊がはいることが許可されます。例えば東部カラコルムでは、昨年のサセル・カンリⅡ峰隊の成功がその良い例です。

破壊されやすいヒマラヤの環境

この世で最も高い山脈であるヒマラヤは、神の創造物として憧れかつ尊敬の対象として、すべての山岳愛好者にとってのメッカとなり、インド国内はもちろん世界中から登山隊やトレッキング隊を集め、年ごとにその数が増えています。しかし、これら非常に若い山々は特別に繊細で弱いものです。人間の活動はすでに大きな規模で山の生態を破壊しています。かつては美しく豊かな森をもっていた山が、急に禿山となり醜い姿をさらしています。

ヒマラヤを何億という細胞から成る一つの生体とみると、山を構成するのはそのうちの5,000万くらいで、その他の何億という細胞はインダスやガンジス、ブラマ・プトラなどの谷や川を構成している、と言えます。ヒマラヤの生態を時計にあてはめてみましょう。アフガニスタンの砂漠は、すでに陽が沈んだ遅い時刻です。アルナチャル・プラデッシュは、まだ朝の早い時刻と言って良いでしょう。ヒマラヤ中部は、ヒマラヤの一日で表わすと、もう午後も遅くなっています。動物や植物は急速に絶滅への道をたどっており、山も人もどんどん貧しくなりつつあります。

地表土が大規模に流出して植物が生成しなくなると、破壊的な洪水が起こって川や湖を泥で埋め、徐々にヒマラヤを砂漠化して、人が住めなくなります。この極めて重大な生態学的問題を広い視野に立って理解するために、まず、この巨大な山脈の起源と進化を振り返ってみましょう。

ヒマラヤの地質学的起源と弱さ

ヒマラヤは、地質学的にはまだ若く、成長の段階にある山脈と言えます。南極の近くにあった大きな陸地、インド大陸が、地球の地殻プレートの動きにつれて5,000キロを移動し、ユーラシア大陸にぶつかり、隆起してできたのがヒマラヤ山脈です。6千万年前のことです。その後何度も隆起を重ねて、最も顕著なものが3千8百万年前に、そして百万年前に最後の隆起が完了して、現在のようになったわけです。ヒマラヤを形成したこの構造地質学的な力は、また、非常に復雑な環境を造りだし、インド亜大陸全体に大きな影響を与えています。それは、まず主としてインドの気候を決定しています。モンスーン期には有難い雨を降らし、冬にはシベリアからの冷たい風を防いでくれます。それらの気候は、環境によってさまざまな特徴を見せます。東部の山麓には南からの湿気をもたらし、冬に降る雪はヒマラヤに蓄えられて、インド北部の河に一年中水を供給します。寒冷砂漠のラダックから熱帯雨林のアルナチャル・プラデッシュまで、気候的地質的多様性は、生態的にもさまざまなものを造りだし、生物無生物を問わず、莫大な資源を提供しています。しかし、そこに生活する人間社会が文化的に発展すると、しばしば人間は環境に逆らい、自然を侵すようになりました。それらの貴重な自然は極めて偉大ですが、同時にまたヒマラヤの最も攻撃されやすい部分でもあります。といいますのは、若い山脈であるヒマラヤの自然の繊細な生態系のバランスは、極めて破壊されやすく、思慮のない干渉に対して全くの無防備だからです。

破壊的な開発

何世紀もの間、ヒマラヤの自然はそこで生活する人間社会に食料や水、居住地、衣料、飼料、肥料などを提供し、生態のバランスを崩さない範囲で人間に利用されてきました。山が人間にとって最適の生活場所ではなく、また人口の増加に物理的な制限を加えているにもかかわらず、そのような人間社会の生活様式が周囲の環境と調和しながら発展してきたのです。土壌や水、動植物など、人間の生活に最低限必要な自然の恵みは、山の生態系をみてみますと、決して無限に与えられるものではありません。山で生活する人たちはそのことをよく識り、それら有限の環境資源を採りつくしてしまわないように節約し、合理的に利用しようとしています。土壌はその勾配と激しい風雨にさらされることによって流出しやすく、厳しい環境に耐えながらかろうじて生育している植物によって構成されている森もまた弱いものです。動物たちは限られた狭い範囲でしか生存できない傷つきやすいもので、人間もまた周囲の環境に依存した生活を営む弱い生きものです。いかなる人間も、山では、自然の恩恵なしでは生きられないのです。

しかしながら、市場経済に基づいた新しい生活感覚を持った人間の波が、「開発」という名のもとに山へ押し寄せた結果、いたるところでそれまでの微妙なバランスが崩れつつあります。森の木は、材木として平野部で利用するために、本来あるべきところから持ち去られました。材木や植物、鉱物資源などを求めて道路が山の奥にまではいり込み、平野部の産業を援助するために巨大な水力利用システムの開発が始まりました。山の自然は、そこで生活する人間や家畜の数が増えてすでに許容の限界にあったにもかかわらず、さらに大きな圧力を加えられるようになったのです。山の草木が大量に伐採されることは、そこで生活する人々にとっては死活問題です。水や燃料が得られませんし、土地は急速にやせます。多くの人々がやむを得ず平野部に移動し、後に残った人々は薪や水を求めてさらに山の奥地へはいり、苦しい生活を強いられています。このような経過により、有名な「ＣＨＩＰＫＯ（チプコ）」運動が山岳地域に起こり、現在もその地方の住民によって実践されています。それは、これ以上森の木を切らせないというもので、広く婦人や子供たちの参加もみています。彼らの生活を支えている土地や水は森によって供給されているのですから、森の保護には彼らの生活が係っているのです。

観光や登山による自然破壊

夏の短い期間に観光や登山を目的として山を訪

れる人たちが急激に増えたことによってもまた、新たな自然破壊が進行しています。これまで閉ざされていた地域への外国人の入域が許され、植物が生長するのに重要な夏の２～３ケ月間に、沢山の登山隊が人気のある山岳に殺到することによって、それらの貴重な自然が目に見えて減少しました。大規模な登山隊が毎年何隊も入域したナンダ・デヴィ内院は、自然が一千年もかけて丹精こめて造りあげた貴重な建造物を短い間に破壊してしまった典型的な例です。高所では植物の成長は極めて遅く、かばの木が６年で直径２㎝になるのに比べて、ねずの一種のある高山性灌木は同じ大きさになるのに20年もかかります。そのような金銭で買うことのできない貴重な資源を失くさないために、自然生態の回復を見まもる保護区を設定するのはやむを得ないことでした。このような状況のもとで、ナンダ・デヴィ内院やフラワー・バレーのような自然の宝庫を国立公園、つまり動植物特別保護区に指定して、純粋に科学的な調査の目的以外には人間がはいることを禁止したのです。同時にウッタルカンド・ヒマラヤにおいてもまた、これ以上の商業目的の森林開発が禁止されました。

小遠征隊のアルパイン・スタイル登山

ヒマラヤ地域における環境の将来を展望してみますと、これから私たちがどのようにして自然を侵すことなく山とかかわっていくかを検討し、生態バランスの保持について真剣に説く必要があるのは明らかです。過去において、大きな登山隊が山にはいらなかった頃は、自然が傷つくことはほとんどありませんでした。しかし、近年になって、急激に大規模な登山隊が増え、山の生態系に耐えられないほどの負荷がかかるようになりました。ヒマラヤの環境破壊をくい止めるために、ＩＭＦは、登山隊の小規模化、簡素化を奨励しています。一つの隊を構成するメンバーは多くとも12人まで、登山方法はアルパイン・スタイルで、というものです。そうすれば、多くのポーターや荷を運ぶ動物を山奥まで連れて行くことはなくなり、不必要な物資を持ち込むことも避けられます。登山隊やトレッキング隊が特定の地域に集中するのを防ぐために入域を制限するのもやむを得ないことです。それら多くの隊をヒマラヤの各地に分散させるにはどうしたら良いか、皆さんのお知恵を拝借したいところです。登山のようにすばらしいスポーツにさえこのような制限を設けなければならないのは非常に残念なことですが、皆さんには理解していただけると思います。

ヒマラヤの科学的研究

ヒマラヤの科学的研究は、残念ながら非常に遅れています。登山隊やトレッキング隊の持ち帰る成果は、そのほとんどが登山の技術的な進歩というようなものに限られています。自然の神秘を解明したり、貴重なヒマラヤの資源についての有益な知識を蓄積したりといった、専問的な研究がなおざりにされているのです。若いヒマラヤ山脈は、地理学的にも生物学的にもさまざまな特質をもっており、科学的に探求され解明されるべきことがまだまだ沢山あります。高所の生体への影響にはいろいろな説が飛び交っていて、詳しい調査が待たれています。私たちは、生物学や地理学など、すべての分野における科学的研究が進歩することを望んでいます。そして、すべての人類共有の財産である魅惑的な山を、この地球上のすべての人によく理解してもらいたいのです。日本隊の皆さんの成果を大いに期待します。

ご清聴ありがとうございました。この次はインドで皆さんとお会いすることを楽しみにしています。　　（訳：吉田憲司）

会費納入のお願い

本会の年会費は前納制となっております。昭和61年度分の年会費を速かに納入下さいますようお願い致します。

尚、６月30日までに納入されない場合は、「ヒマラヤ」に「前金切れ」の表示をして督促しますが、それでも納入されない場合は、会費が納入されるまでヒマラヤの発送を停止します。

年 会 費　6,000円

納入期日　昭和61年６月30日

※終身会費制度もあります。詳細は事務局迄。

――N・D・ジャイアル氏滞日日誌――

1／11（土）　AI－306便にて成田到着。小島理事、吉田事務局員が出迎える。初めての日本訪問に緊張したためか、機中では一睡もできなかったと訴え、都内へのリムジン・バスのシートでウトウトする。夕方ホテルで稲田専務理事らと打ち合わせ。夜は遠藤副会長らを交えて夕食会。同席した山田昇会員に、昨秋エベレストで起こったインド隊の事故について詳しく質問される。

1／12（日）　インドヒマラヤ会議にて講演。今年インドへ向う登山隊の代表者と挨拶する。その後、日本山岳会（JAC）吉田宏氏邸での昼食会に招かれ。同席した田部井淳子、植村公子氏らと歓談。故植村直己氏の偉業の半分は公子夫人の功積ですと大いに称え、その死を悼まれた。夕方から夜にかけて銀座を歩く。デパートや洋書店を見物。人の多さとネオン・サインの華やかさに驚く。

1／13（月）　浅草より日光へ向う。ちょうど好天に恵まれ、小島理事の案内により、いろは坂から中禅寺湖、湯元方面を車で巡る。本人の希望により、戦場ケ原から光徳牧場へ向って雪道を歩く。夜は宿泊先のペンションで日光周辺の寺社や自然のスライドを観賞。動植物に詳しいジャイアル氏は、居あわせた外国人客に解説を付けられた。

1／14（火）　午前中、東照宮などを見物。神社や寺院のいたるところにある絵や彫刻がすべて動物を描いていることに興味を示す。午後、一旦東京へ戻り、名古屋に向けて新幹線に乗る。そのスピードに驚き、車窓から眺めた富士山に感動する。名古屋では枡井会員の出迎えを受け、エアー・インディア名古屋営業所を訪ねた後、HAJ中京地区会員らとの夕食会に臨席。

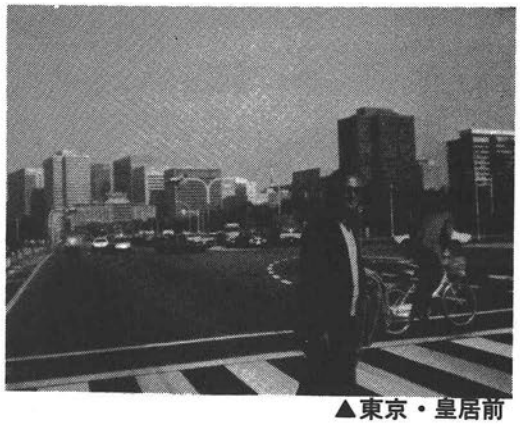
1／15（水）　'85年HAJサセル・カンリ隊の沖隊長、徳島隊員とその家族の案内により、根上高原、恵那峡、馬籠宿などを見物。家族的なもてなしに大いに感激する。

1／16（木）　本人の希望により、名古屋東山動植物園を見学。朝9時半の開園と同時に入り、昼過ぎまでほとんど休憩することなく園内を歩く。植物園では、興味を魅かれた植物について克明にメモをとるほどであった。また、いくつかのインド産の植物は、現在インドではほとんど見られないと言い、日本の植物園で初めて見たと喜んだ。夕刻東京へ戻り、夜は外人記者クラブで開かれたJAC主催の歓迎夕食会に出席。佐々前JAC会長、大塚副会長らに迎えられ、吉沢一郎氏や田口二郎氏らと、1950年代のヒマラヤ登山などについて語られた。

1／17（金）　東京、北の丸公園を散策。途中訪れた国立近代美術館では、現代的な抽象芸術よりも、風景や人物を描いた日本画を熱心に観象された。その後大手濠沿いを歩き、さらに表参道から明治神宮を散策。夜はHAJ主催のさよなら夕食会。席上、HAJからのおみやげとして、遠藤登副会長より軽登山靴が贈られる。

1／18（土）　CX－501便にて離日。尾形理事、吉田事務局員が成田まで見送る。

▲名古屋・東山植物園



▲東京・皇居前

地域ニュース

《パキスタン》

クンジェラブ峠のオープン

待望のクンジェラブ峠（4,795m）がいよいよ5月1日からオープンになる。当面は輸送機関や受入れの都合もあって、1週間に2グループ・ツァーのみ通行許可が貰える。

パキスタン側は、ススト と云う地点にチェック・ポストが設けられ、中国側のペラリ（通関事務所）まではパキスタン政府の輸送バスにて通過するようになる。ペラリからタシュクルガン、カシュガルへは中国政府の輸送機関が使われる。カシュガルから先は、そのまま北京経由で日本へ帰ることも可能である。但し、交通機関はチャーターとなる上、空車で帰る料金も取られるので割高にはなるであろう。

フンザから先はグルミットにレスト・ハウスがあるのみ。ススト にもＰＴＤＣによる休憩所（2部屋）が設けられたが、フンザから先の宿泊施設は十分ではない。

尚、バツーラ橋以北は、カラコルム・ハイウェー上のみが許可になるだけで周辺の山や谷は、従来通り入域禁止となっている。

《インド》

値上げ反対デモーニューデリー

インドのガンジー政権が1月31日に発表した物価値上げ政策に反対する抗議行動が3日、ニューデリー中心部で行われ、警察当局によると、首相官邸に向かおうとした約2,000人が逮捕された。

この値上げ政策は財政赤字を補うためで、2月から食料、燃料油、その他の生活必需品などの価格が25～40％引き上げられた。

政界、実業家グループ、労働組合等が非難していた。

（2月4日　朝日新聞）

《中　国》

中国の山地に新種の蝶

中国・新疆ウィグル自治区東部の山岳地帯でこのほど蝶の新種が見つかった。4日の新華社電によると、発見者は新疆大学の黄人鑫講師で、同じ自治区のタクラマカン砂漠南東にあるアルチン山脈一帯の野生生物調査の際に採集した。白い羽に黄色の縞模様が入った新種の蝶は、中国の著名な蝶類学者、李伝隆教授の名にちなんで「李蝶」と命名された。

中国旅遊会設立

中国旅遊（観光）協会が、国務院の承認を受けて、1月30日に北京で設立された。同協会名誉会長の谷牧・国務委員が祝いにかけつけ、挨拶した。

同協会は、中国の観光部門、観光関連部門ならびに観光事業に熱心な著名人専門家で構成されている。協会の目的は、関係方面の力を結集、動員し、中国人民と世界各国人民との相互理解と友誼を深め、社会主義観光事業の経験と法則を交流・検討し、中国の観光事業の発展に寄与することとされている。

同協会の役員には、谷牧・国務委員が名誉会長、王越毅国家旅遊局副局長が会長にそれぞれ就任され、趙樸初中国仏教協会々長、韓克華国家旅遊局々長、霍英東香港中華総商会々長、朱卓任ハワイ大学観光学部長が名誉顧問に招へいされた。

また、協会顧問で有名な経済学者の于光遠氏は同日の設立大会で、同協会が中国の観光事業を絶えず発展させるため、観光経済学、観光文化学、観光歴史学、観光社会学などの課題について研究するよう提起した。

中国公安省、外国人に開放する244地区を公表

中国政府は外国人に開放する地区を調整し、昨年までの107カ所から244カ所に増やすことを決定した。

「中華人民共和国外国人入国出国管理法」が施行される2月1日から、有効な査証や在留証明書

を持つ外国人は、これらの地区に出かけることができる。

対外開放地区は次の通り

○北京市、天津市、上海市

○河北省～秦皇島市、石家荘市、承徳市、保定市、唐山市、邯鄲市、涿県

○山西省～太原市、大同市、臨汾市、運城市

○内蒙古自治区～フフホト市、乞頭市、エレンホト市、満州里市、通遼市、ハイラル市、東勝市、シリンホト市、ジャランアイル市、ダドラ旗

○遼寧省～瀋陽市、大連市、鞍山市、撫順市、丹東市、錦州市、営口市、阜新市、遼陽市、本溪市、鉄嶺市、朝陽市、盤錦市

○吉林省～長春市、吉林市、延吉市、四平市、遼源市、通化市、白城市、安図県（長白山自然保護区）

○黒龍江省～ハルビン市、チチハル市、大慶市、チャムス市、牡丹江市、鶏西市、鶴崗市、七台河市、伊春市、五大連池市

○江蘇省～南京市、蘇州市、無錫市、連雲港市、南通市、常州市、揚州市、鎮江市、徐州市、淮陰市、塩城市

○浙江省～杭州市、寧波市、紹興市、温州市、嘉興市、湖州市、金華市、椒江市、普陀県（普陀山遊覧区）

○安徽省～合肥市、蕪湖市、黄山市、蚌埠市、屯溪市、馬鞍山市、安慶市、淮南市、淮北市、滁州市、巣湖市、歙県、鳳陽県、涇県、九華山遊覧区

○福建省～福州市、アモイ市、泉州市、漳州市、崇安県

○江西省～南昌市、九江市、景徳鎮市、鷹潭市、井岡山市、贛州市

○山東省～済南市、青島市、煙台市、泰安市、坊市、淄博市、済寧市

○河南省～鄭州市、開封市、洛陽市、安陽市、新郷市、信陽市、南陽市、濮陽市、平頂山市、温県

○湖北省～武漢市、宜昌市、沙市市、襄樊市、咸寧市、丹江口市、黄石市、荆門市、鄂州市、十堰市、江陵県、

○湖南省～長沙市、衡陽市、岳陽市、湖潭市、株州市

○広東省～広州市、仏山市、肇慶市、深圳市、珠海市、汕頭市、海口市、湛江市、中山市、江門市、韶関市、茂名市、恵州市、潮州市、三亜市、梅県市、東莞市、高要県、瓊山県、定安県、瓊海県、万寧県、屯昌県、澄邁県、臨高県、儋県、文昌県、保亭県、白沙県、瓊中県、陵水県、楽東県、東方県、昌江県、興寧県、恵陽県、博羅県、河源県、陸豊県、海豊県、恵東県、新興県、雲浮県、四会県、封開県、徳慶県

○広西チワン族自治区～南寧市、桂林市、北海市、柳州市、梧州市、賓陽県、桂平県、容県、貴県、北流県、興安県、陸川県

○四川省～成都市、重慶市、楽山市、万県市、雲陽県、奉節県、巫山県、忠県

○貴州省～貴陽市、安順市、遵義市、凱里市、六盤水市、施秉県、清鎮県、鎮遠県、黄果樹風景区

○雲南省～昆明市、大理市、玉溪市、楚雄市、曲靖市、通海県、景洪県、勅海県、思茅県、麗江ナシ族自治県

○チベット自治区～ラサ市

○陝西省～西安市、咸陽市、延安市、宝鶏市、韓城市、

○甘粛省～蘭州市、白銀市、嘉峪関市、酒泉市、天水市、臨夏市、永靖県、敦煌県、夏河県

○青海省～西寧市、湟中県（タール寺）、ガルモー市、共和県

○寧夏回族自治区～銀川市、中衛県

○新疆ウイグル自治区～ウルムチ市、石河子市、トルファン市、カシュガル市

インフォメーション

東京集会のお知らせ

3月の東京集会は下記の通りです。皆さんお誘い合わせの上、お出かけ下さい。

日　時　3月31日（月）18時30分～

場　所　HAJルーム

カラコルムの山旅

東京志岳会マラングッティ・サール登山隊

1985年

▲マラングッティ・サール西面

はじめに

前年の9月、私はTと2人で甲斐駒の黄連谷を登った。ビバーク中、話のはずみで来年（'85年）カラコルムへ行くことになった。

2人共仕事が忙しい身体だから期間は1ケ月半、パキスタンならば4人のメンバーは必要だ。山は標高7,000m前後、それも一目見ただけでムラムラと登攀意欲が湧き上がるような峻峰がいい。しかも未登峰に限る。他人のトレースをあてにして登る山は面白味が半減してしまう。ましてそれがめったに行けないヒマラヤとなれば尚更だ。まずは山と向かい合って山全体を眺め、自分達の一番納得のできるルートを考えたい。登山期間が短いので、アプローチが近いカラコルム・ハイウェー周辺の山に的を絞った。

バツーラ山群の6,885m峰、カルン・クー（6,976m）マラングッティ・サール（C 7,200m）等幾つもの候補が上がった。私はカルン・クーに一番魅力を感じた。小カラコルム、グウジェラブ流域の最高峰である。標高は低いが回りに高い山がないから、バツーラやヒスパー方面から眺めるとまるで独立峰の様だ。過去に1度外国隊の挑戦をうけたが、まだ登られていない。しかし今年も、この山に2つの登山隊が挑んでいた。私はこの2隊の動行を聞くべく、今年マラングッティ・サールへ行って帰国したばかりの釧路の知人Kに電話をした。

Kは一般には知られていないが、カラコルムに関してはなかなかの情報通である。彼は「カルン・クーはオーストリア隊に登られた。それよりも釧路隊が登りそこなったマラングッティ・サールがいい」としきりに勧める。そしてなんと「自分も一緒に行きたい、メンバーは他にもう1人いる」と言って私をあきれさせた。

私はカルン・クーが登られたと聞いて、不謹慎ではあるが山はどれでもいいような気がした。マラングッティ・サールは峻峰ではないが、未登の7,000m峰だ。私とK以外にとっては初めてのヒマラヤなので、今後のよきステップにもなるだろう。

すでにパキスタン大使館でのアプリケーション受付の期限もせまっている。今さら再検討の時間などない。私は取敢えず釧路の2人を加えて簡単な計画書を作り、都岳連と日山協の推薦を得て、10月31日にパキスタン大使館へ駆け込んだ。

計画・準備

マラングッティ・サールはヒスパー山群の北西部に位置し、カラコルムでは残り少ない未登の7,000m峰だ。ヒスパー山群の主稜線から北に大きくはずれているため資料が少なく、長い間幻の山とされていた。1974年以来、日本からも何度

か登山申請がなされていたが、唯一のアプローチであるシムシャル谷は外国人にとざされたままだった。それが1982年に俄に解禁され、'83年には2つの偵察隊が入山し、また'84年には釧路の羆(ひぐま)山の会隊がモムヒル氷河にBCをおいて、西面から6,300mまで登った。

11月に入ると釧路からマラングッティ・サール西面の写真が送られてきた。頂稜が南北に長々とつながった、ノッペリした山だった。太郎平から見た春の薬師岳の様だ。写真を撮った位置も悪かった。山の真下から見上げている。もっと離れ、もう少し高い場所からならば、こんな無残な写真にはならないだろう。Tなど「饅頭山かい」と言ってガッカリしていた。私も予想以上の形の悪さに落胆した。

登山申請の期間がおしせまっていた為、目標の山のみは先行して決めてしまったが、本来ならば参加希望者全員がまず一同に集まって、計画の概要を徹底的に検討すべきであろう。その上で、その内容に納得できない者はすみやかに去り、真に行きたいと願う者のみが集まってその計画をおし進めるべきだ。この第一歩をはっきりさせておかないと以後の準備活動や、現地での活動の折に、大きなトラブルが生じやすい。もっとも全員の総意を得て計画を決定したとしても種々の情勢によっては、登るルートが変わったり、時には山や隊員まで変わってしまう。ヒマラヤの計画とはだいたい二転、三転するもので、そのつど各隊員間に考え方のズレはあるだろう。しかしそれらのズレは発足時の方針がはっきりしていれば、なんとか乗り越えられるものと私は考えている。

しかし東京と釧路の間は遠かった。11月にKが1回やって来たが、とうとう年内に隊員が一同に集まることはなかった。正月合宿は、お互の登山技術の確認と親睦を兼ねて北アルプスへ行った。東京勢はTと村中、杉本が、釧路からは初めて顔を合わせる中原がやってきた。

私はこの合宿の入山日に、学生時代からの知人で過去2回ヒマラヤ行を共にしたWの死に出会った。私にとって、彼はヒマラヤでの最良のパートナーであった。Wは今年（'85年）ガッシャーブルのⅠ峰とⅡ峰を連続して登る計画をたてていた。私も誘われたが、3ケ月もの休みがとれず、今回はダメだが、前回失敗したアンナプルナの雪辱戦はぜひいっしょにやろうと計画していた。

そのWが死んで、私には総ての山が色あせて見えた。マラングッティ・サールなど、なおさらつまらなそうな気がした。

釧路勢が所属する会でも正月に3名の死亡事故があり、事故処理に忙しそうだった。

3月に登山許可を受け取った。しかし4月に入っても釧路からは誰も出て来ない。計画はストップしたままだった。そのうち有力メンバーTの参加があやうくなった。「饅頭山では登攀意欲が湧かない」という。私も仕事がはかばかしくなく、計画は一時うやむやになるかと思われた。

5月中旬、中原が上京してきた。彼は高校の教員をしていたが休暇がもらえず、ついに学校をやめてきたという。公務員が仕事を投げ打ってやって来たのだ。これで私の腹も決まった。その意気込みがあればやれると思った。反対に相変わらず参加意志のはっきりしないTは切り捨てた。

隊荷の発送まで約1ケ月間、ようやく計画の詳細を検討できるようになり、バタバタと準備にとりかかった。

看護婦の石切さんはB.Cまでということで、急遽参加が決まった。私には秘蔵の刀が一本あった。大根くらいは十分切れるだろう。それはネパールのトレッキング・シェルパで名はアン・ニマという。彼は出稼せぎを兼ねて日本にも何度かやって来たことがある。 '83年の冬にコックとして、私とアンナプルナへ行ったが、大きな山に登ったことがない。従って登山技術はまったくないが、しかし登りたいという意欲は人一倍強かった。昨年秋、彼がネパールに帰国する前にこの計画を話すと、給料もなく、個人装備も自分で用意するという悪条件にもかかわらず、「ぜひ」と行きたがった。そこで私は、こっそりニマの名前もアプリケーションに入れておいた。

隊荷発送の直前になって、突然Kが参加できなくなった。隊の有力メンバーであったTもKも脱落した。残るは私（杉本）に登山経験の浅い中原と村中、それに登山技術のないニマとB.C要員の

石切さんだ。Kは補強隊員として前年ナンガ・パルバットへ行ったことのあるOを、彼の替わりに参加させるという。はたからは「このメンバーでは登れない」と見えたのだろう。当然の見方と私も思う。しかし、私には私なりの勝算があった。

マラングッティ・サールは登山技術の面からは比較的やさしい山だ。日本の春山でちょっとした登攀が可能なメンバーならば通用するだろう。それよりも短い日数で、いかに高所順応するかの方がはるかに問題だ。特にヒマラヤ登山が初めての中原と村中には大きな疑問が残る。ヒマラヤ何度目かの私も最近、体力の衰えが著しくへたをすれば彼等の足でまといにもなりかねない。しかしこの三流メンバーでも高所順応を最優先にしたタクティックスを組み、普段の総ての活動までも高所順応を念頭に置いた行動がとれれば、登攀隊員（4名）全員とはいかないまでも2～3人位は、頂上に立てるのではないかと私は思った。そこで今さらOを加えてせっかくまとまりつつあるチーム・ワークをくずすより、この5人で行くことに腹をくくった。

計画概要

目　　的：カラコルム山脈、マラングッティ・サール（C. 7,200m）の初登頂

隊の名称：東京志岳会マラングッティ・サール登山隊1985年

期　　間：1985年7月8日～8月25日（49日間）

隊の構成：登攀隊員　4名
　　医療係　　1名　（計5名）

隊　　員：杉本忠男（39）、中原健吾（29）、村中　康（24）、アン・ニマ（24）、石切寿子（33）── 医療係

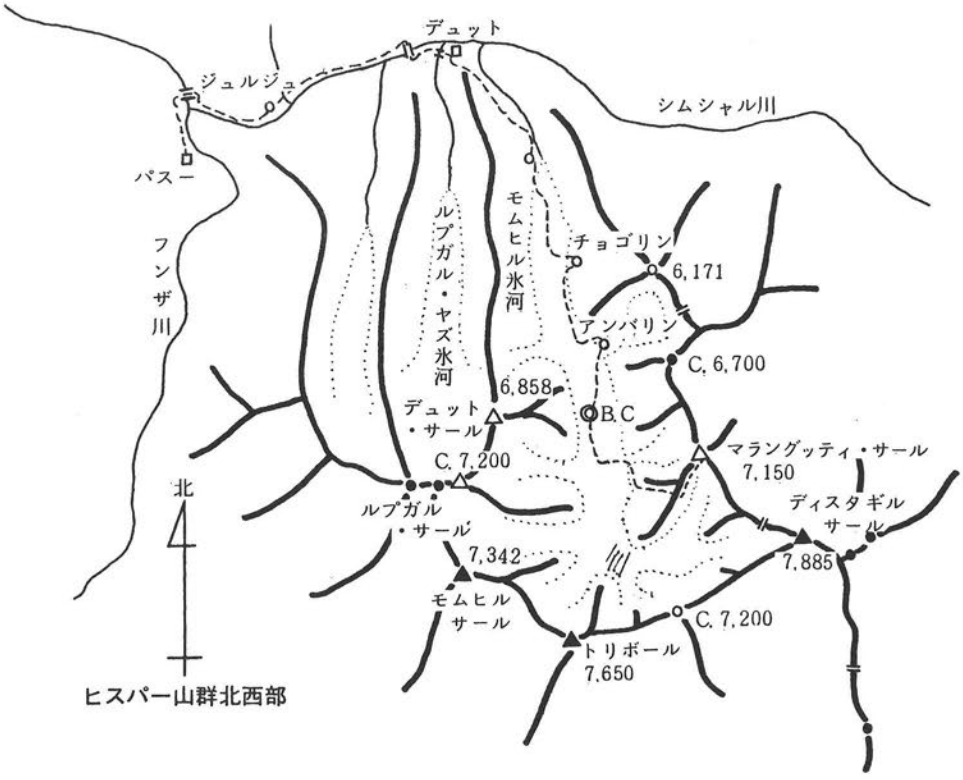
フンザへ

6月24日、中原が単身ラワール・ピンディへ向かう。昨年の釧路隊がギルギットにデポした装備を確認に行くのだ。

7月1日、隊荷（360kg）発送。

2日、アン・ニマはネパールより陸路でラワール・ピンディ入り。しかし中原は不在で会えず。

7月8日、本隊（杉本、村中、石切）成田発。



ヒスパー山群北西部

見送りなど１人もいない。なんともてない３人だろう。アルコール類を一切送っていなかった事を思い出し、あわてて成田でウィスキー６本、北京でビール４ダースを買う。イスラマバードには夜８時20分着、機外へ出るとあの独特のムッとする臭いがなつかしい。カスタムでは手荷物の中に隠しきれずにかかえていた酒類は、あっさり没収されてしまった。残念、無念。出迎えの中原とニマに再会、予定していたフラッシュマン・ホテルが満室で、マールのシルバー・グリルに落着く。レストランで再会を喜んでいると、リエゾン・オフィサー（L.O）もやってきた。

９日、今日から３日間でピンディでの一切の仕事を片付け、12日にはギルギットへ向けて出発する予定だ。午前中、観光省へ挨拶、午後はカスタムから別送品を引き出すという滑り出しの良さ。ところが10日の深夜になって、全員のパスポートがないのに気づき、大騒動。３部屋をくまなくさがしたが見つからない。ＳＳＰからの帰路、タクシーの中へ忘れたらしい。

11日、ブリーフィングの予定は流れ、替りに大使館でパスポートの再発行手続をしたり、ＳＳＰや市内の警察を回るはめになった。

12日、パスポート騒動での落込みをクリヤーする為、今日は一日休養日とし、全員でタキシーラの遺跡を見学に行く。夜は中華飯店で少し贅沢をした。パキスタンもやはり変わりつつあるようだ。女性ドライバーも見かけるし、この店にはなんと、若い女性が２人だけで食事に来ている。５年前には考れられなかった光景だ。

14日、L.Oがスワートの実家へ帰ったきり戻って来ず、今日もブリーフィングが流れた。3,000 Rsものアドバンス・マネーを持たせたのがまずかったのだろうか。明日、L.Oが来なければ、私とニマが残り、他の隊員は隊荷とともにギルギットへ出発させよう。

15日。朝、L.Oがビクビクしながらやって来たが怒る気もしない。さっそく観光省へ行ってブリーフィングを済ませる。午後、何度もかよった甲斐があってリカ（酒）・パーミッションを手に入れた。さっそく空港へタクシーを乗り付け、先日没収された酒類を総てとり返えした。あまりうまく

▲A・BC上部より右氷河

いったので、帰りのタクシーの中では笑いが止まらなかった。

夕方、バタバタ荷造りを終え、隊員と隊荷を乗せたチャーター・バスはようやくギルギットへ向けて動き出した。

16日、バスは文字通り昼夜走り続けて、昼頃ギルギット着。全身の砂ぼこりを洗い流す為、まず床屋へ急行する。パキスタンの床屋には大方シャワー・ルームがあるからだ。シャワーといっても水とぬるま湯が出る程度だが、貧乏旅行にはこれが結構助かるのだ。午後は昨年のデポを回収したり、食料を購入する。

17日、バスはフンザの中心街を通り過ぎて、パスー村に到着。数軒のホテルはいずれもトレッカーで満室だった。我々は仕方なくフンザ川の河原にテントを張った。村では福岡隊がパスーの登頂に成功したニュースで一杯だ。夕方、隊長の新貝さんがやって来た。パスーに住み付いている画家の山田御夫妻にもお会いした。

夜は福岡隊のサクセス・パーティに招待され、村中を荷物番に残して４人で出かけた。フンザ・ミールの兄弟をはじめ、沢山の来賓があり、歌や踊りで大賑わいだった。成功の美酒に酔えるのは羨ましい限りだ。我々も最後にはうまい酒にしなければ……。

キャラバン

７月18日、山田さんの尽力で数日も前から、シムシャルのポーターが４～50人集まっている。福岡隊のサーダーだったシムシャル出身のシャンビ・ハーンが我が隊でもサーダーとしてB・Cまで行

▼C 3 （6,500m）

くという。そして彼はB•Cからとって返して、福岡隊の2つ目の山ナンガ・パルバットへ駆けつけるのだそうだ。なんと恐るべき体力。彼にとっては、こちらのキャラバンが休養期間の様だ。

パスーからB•Cまで6日行程、ポーターの賃金はリターンやレーション代を含めて1日162 Rs、別に装備代として56Rs 必要だという。レギュレーションでは1日135 Rs になる計算だが……。我々の乏しい懐には大打撃だ。しかし、すでにこの金額で妥協している隊がある為、いくら交渉してもらちがあかなかった。

簡単な健康診断をやり、34名のポーターを決めてパスーを出発したのは昼近かった。

フンザ川の吊橋を渡り、あこがれのシムシャル谷に入る。シムシャル川はほとんど草木もない茶褐色の岩場の間をゴルジュとなって流れている。岩場の途中には巧みに石を積み上げ、所々発破をしかけて作られた道が延々と続く。よくこんな所に道が作れたものと感心してしまう。今日の泊り場ジュルジュには夕方遅く到着した。

19日、道は相変わらずゴルジュの中、途中、技沢に降り立つのにロープを使った。これが本当にシムシャル村と文明界をつなぐ唯一の道なのだろうか。昼頃、デュット（ドォット）に着いた。サーダーはもっと先まで行きたがったが、ポーターが動かなかった。

20日、今日はデュット ── ヤズミス ── チョゴリンの2日行程を、1日で行くことになった。出発して間もなく、モムヒル谷のゴルジュ帯を高捲く。ガレ場の嫌なトラバースが長々と続く。振り返るとカルン・クーⅡ峰が、しばらく進むとⅠ峰が眺められた。ヤズミスはモムヒル氷河末端附近の総称らしい。モムヒル氷河へ上がった所で、早目の昼食となった。食後、ポーターは歌ったり、踊ったりの大騒ぎだ。こちらはポーターより一足先に出発したが、氷河が荒れていて、なかなか進まない。夕方くたびれきってサイド・モレーンを登り、チョゴリンに着いた。日が暮れる頃、昨日手を打っておいた3頭の羊が、ルプガル・ヤズの放牧地からつれてこられ、さっそく2頭が隊員やポーターの胃袋におさまった。

21日、チョゴリンから眺めるデュット・サール（6,858m）は、素晴らしい氷の尖峰だ。

ポーターは食料が残り少ないのでB•Cまでの2日行程を1日で行きたいと言う。しかし高所順応の面から我々には受け入れがたい提案だった。妥協案として10人のポーターが残り、隊員と共に今日の予定地アンバリンに泊る。他のポーターはB•Cまで荷上して今日中にチョゴリンへ帰って来る。B•Cの位置確認及び荷上の管理はニマに行かせる事になった。

チョゴリンから1時間半、サイド・モレーンを登り返すともうアンバリン（4,100m）の一角だった。アンバリンは高山植物に飾られ、おそらくこのモムヒルの谷では一番美しい場所だろう。

午後B•Cから戻って来たポーター達は賃金を受け取ると、満ちたりた顔で手を振りながら帰っていった。夕方、高所順応の為、裏山を標高4,500m附近まで登る。アンバリン・サール（6,171m）が手近に眺められた。

22日、寒い朝だった。再び氷河へ降り立ち氷の道を1時間40分ほどで、標高約4,200m のベース・キャンプ予定地に到着した。トリボールを真正面に、西側にデュット・サールを見上げる地点だ。残念ながらまだマラングッティ・サールは望めない。ラワール・ピンディ以来下痢が止まらない中原は、今日が最悪の体調で、午後ポーターに助けられながらB•Cにたどり着いた。

夕方までに5張のテントを張り終えると、少しはベース・キャンプらしくなった。

登 山 活 動

当初の計画では、Kの勧めで昨年の羆（ひぐま）隊のルートを踏破し、それを延長する予定であった。他に

いいルートはないとのことだった。

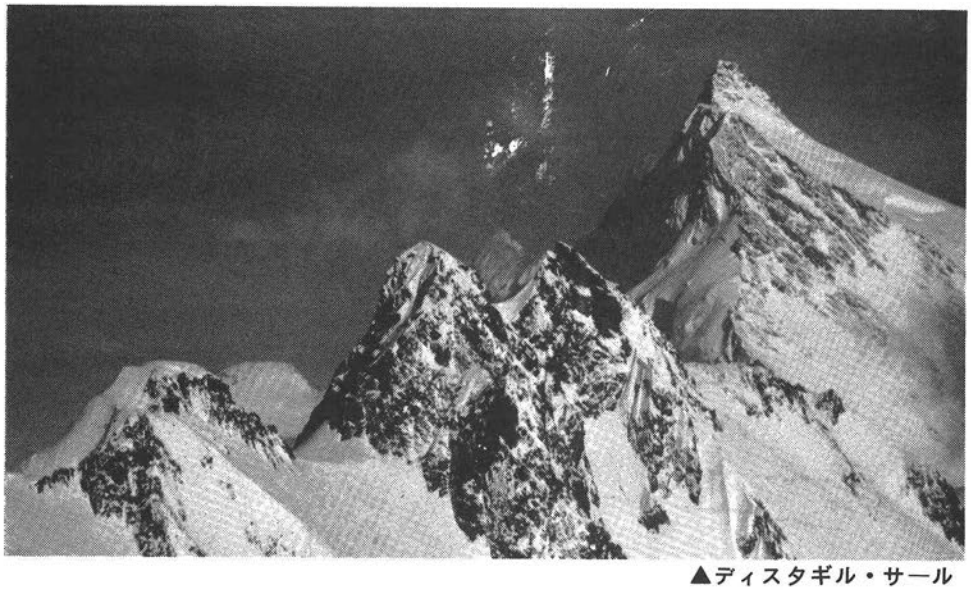
7月23日、不調の中原を休ませて、他は上部の偵察へ向かう。B•Cを出て小1時間ほどモムヒル氷河を進むと、写真で見おぼえのあるマラングッティ・サールが徐々に姿を現わし始めた。意外に小さな山だ。ひょっとするとここから見えるピークより、さらに奥に真の頂上があるようにも思えた。モムヒル氷河をさらに進み、羆隊がルートとした枝氷河（羆氷河と仮名）の出合まで行って見る。昨年のルートがおおよそ目で追える。C1から上部はゆるやかな雪壁が頂上まで続いていた。

午後からは山をなるべく離れて見ようと、モムヒル氷河の左岸を目指したが、大きなクレバス帯に手間どり、左岸にはたどり着けなかった。しかし少し離れて見ると、マラングッティ・サールはピークらしい形になってきたのでやや安心した。ここからディスタギル・サールへ続く南東稜はまったく見えないが、羆ルートや南西稜は良く見渡せる。羆ルートは、ルートの内容が大方判明しているという利点はある。しかし頂上直下まで稜線に上がらないので、どれが真の頂上なのか最後まで確認できないこと。雪崩に対する危険性が割と高いことが気掛りだ。

私は羆氷河より1本上流で、南西稜に突き上げる小さな枝氷河に目を止めた。それは氷河としての活動がにぶく、まるで休眠中の氷河のようだ。したがって雪崩の危険もずっと少ないだろう。それに早々と南西稜に上がれるので、真の頂上がどれなのか、すぐ確認できるのではないか。南西稜の上部も技術的に問題なさそうだ。手持ちの装備でもなんとか行けるだろう。B•Cへ帰り着く頃には、私の腹はルート変更に決まっていた。

今回の登山は技術も体力も三流のパーティが、短い日数でいかに高所順応し、かつルート工作をして頂上に立つかという大きな問題をかかえている。私の採った方法はできるだけ体力を消耗しないように務め、最後のアタックの1日のみに全力を投球するのだ。言葉を替えれば、どれだけ余力を残して最終キャンプを作れるかにかかっている。それにはまず、日常の活動でなるべく緊張しないこと、精神的なプレッシャーを受けないことだ。心のりきみや焦りが余分な筋肉を緊張させ、時には思考を硬直化させて疲労を増大させる。だからいつもリラックスして行動しよう。隊員には余計な不安感を持たせないように務めよう。また最初の5日間はハイ・ポーターを雇い、B•CからA.BCまでの荷上は総てハイ・ポーターにまかせる。この間では隊員は一切荷上を行なわない。さらにA.BCから上部の荷上は必要最小限度のものに厳選し、余計なものは荷上しない等のことを考えた。

7月24日、トリボールに絹雲が掛かり天候は下り坂だが、登山は開始された。今日はC1予定地を決めなければならない。中原と石切さんは休養し、杉本、村中、ニマ及び3名のハイ・ポーターで出発。途中、村中とクレバス帯の近道を探っているうちに、ニマとポーターに置いていかれてし



▲ディスタギル・サール

まった。キャンプ予定地の決定を彼等にまかせる訳にはいかないので、頭痛で頭をかかえている村中を帰し、彼等の後を追った。羆氷河から小1時間ほど進むと右氷河（仮称）の入口だ。ここでポーターに追い着き昼飯とした。右氷河は発達の悪い小さな氷河で、モムヒル氷河の上部300m程の所で消滅している。右氷河の末端まではガレ場をひたすら登った。氷河左手の岩場に狭いテラスを見つけ、アドバンス・ベースキャンプ（A.BC）の予定地とした。標高4,800mはあるだろう。

25日、曇り、夜一時雨。今日はA.BC上部のルートを確認に行く。中原、村中は不調の為、私とニマで出掛ける。ポーターは先行して途中、初日にデポした荷物も加え、各自30kg以上背負っている。ニマはA.BCの手前で彼等を追い抜いたが、私はとうとう追い着けなかった。昼食後、ニマとA.BC上部を偵察する。氷河左手の小さな岩稜を200mほど登った後、氷河へ降り立った、標高約5,000m。ここから南西稜へ突き上げる右氷河がほとんど見渡せた。全体的に浅いクーロアール状をなし、途中に何ケ所か急斜面をかかえている。稜線直下には200mほどの雪壁があるものの、技術的には問題はなさそうだ。下半分は右手の斜面からブロック雪崩の危険が若干ある程度で、羆氷河よりはるかに安全だろう。ニマも、自分にも登れそうなのが解ったのか大喜びだ。今日の偵察の成果に満足しつつ、軽い足取りでB•Cへ引き返した。

26日、朝雨のち曇り。私とニマ及びハイ・ポーターは休養日。体調が回復しつつある中原と村中は、石切さんを伴ってA.BCを往復する。

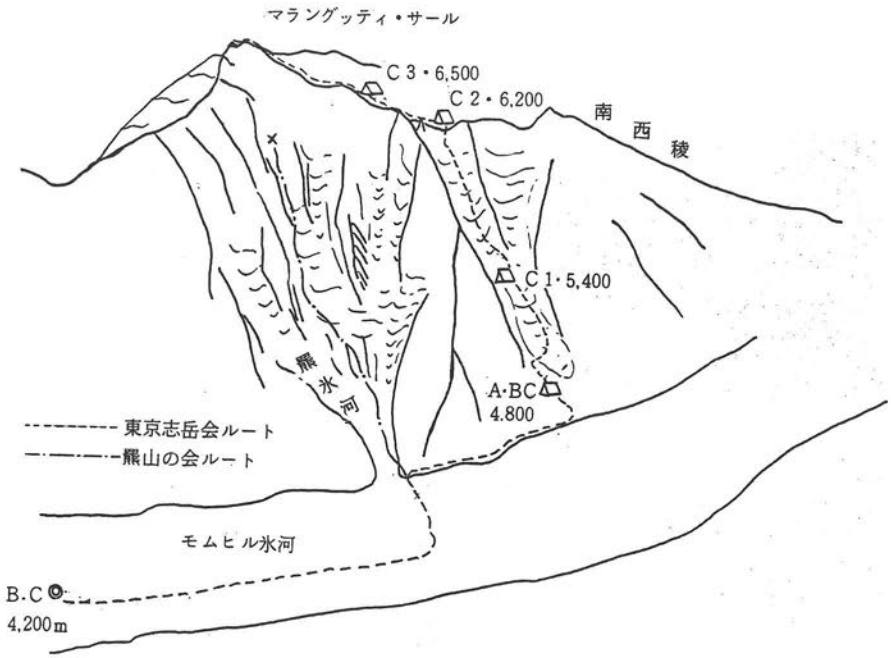
夜、L•Oの腹痛騒ぎがあったが、仮病説が有力。

27日、今朝も雨が降った。今日は石切さんも含めて全員A.BC入りの予定だ。頂上を踏むまではB•Cへは帰らないだろう。例によって仕度がなかなかできず、10時に出発。ハイ・ポーターには最後の日の仕事だが、各自20kgも背負っていて我々の私物には手が回らない。個人装備は総て各自が荷上することになった。

A.BCではニマが大活躍。岩だらけのデコボコテラスを整地して、なんとか2張のテントを張った。

28日、晴。全員高所順応を兼ねて上部の偵察に向かう。先日の最高到達点をすぎ、いよいよ右氷河を登る。第一ステップは難なく通過。第二ステップは雪崩道をさけて2ピッチほどロープを固定し、5,400mまで登った。

29日、快晴。今日は一気に南西稜までルート工



作をしてしまおうと勇んで出発。しかし日が差すとうだるような暑さでピッチが上がらず、昨日のデポ地点に着いたのは11時になってしまった。A.BCから稜線まで、高度差約1,000mと踏んでいたが、どうももっとありそうだ（実際には1,400m）。そこで急遽このデポ地をC•1（5,400m）と定め、ルート工作は明日以降に持ち越した。安易な妥協には誰も反対しない。A.BCへの帰路、大きな雪崩があった。対岸のトリボールからデュト・サールにかけて、一勢に雪崩が発生、10ケ所位は雪煙を上げている。我々はそのとき下降ルートを探りながら、急なクーロアールの真中にいた。頭上からいつ雪崩が襲ってくるのか気が気ではなかった。トリボールからの爆風はA.BCをも雪煙に包んだとのことだ。地震があったことを後日知った。

30日、晴。中原は体調が悪く、石切さんと供にA.BCに停滞。村中、ニマ、杉本がC•1入り。昼すぎC•1のテントを張ったが、テントの内も外も焦熱地獄だ。濡れたタオルを頭にのせて凌いだ。

31日、晴。今日は稜線までルート工作の予定だったが、これが少し甘かった。C•1の上部には幾つものクレバスがあり、一つづつ飛び越える（飛び上がる）が、息切れがする。10時頃からは、例の焦熱地獄もやってきた。

A.BCとの交信は朝6時からトライしているが、まったく応答なし。石切さんになにかあったのだろうか、C•1へ向かった中原は大丈夫だろうか。心配でついには下ばかり眺め、登高がはかどらない。第四ステップの上で昼食。ノロノロと稜線直下にたどり着いたのは3時近かった。

最後の壁は高度差200m。傾斜はそれほどないが取り付きや壁の途中にクレバスが走り、小さいながら雪庇も張り出している。村中とニマが動かないので、ロートルのお出まし。最初の壁とクレバスを越え、50mほどルートを延ばした。あとは60度たらずの単調な斜面が4ピッチほど、稜線直下の雪庇まで続いていた。だが夕陽を浴びた斜面はスノー・シャワーが間断なく落ちて登れず、今日はここで打ち切った。帰路第四ステップに2本のロープを張った。第三ステップのクレバス帯は雪が腐って危険だった。アンザイレンして飛び越

▲初登頂を終えて、左から村中、石切、中原、杉本、ニマ

えたが、一度首まで潜ってヒヤリとした。7時C•1着。中原が無事に上がってきていた。

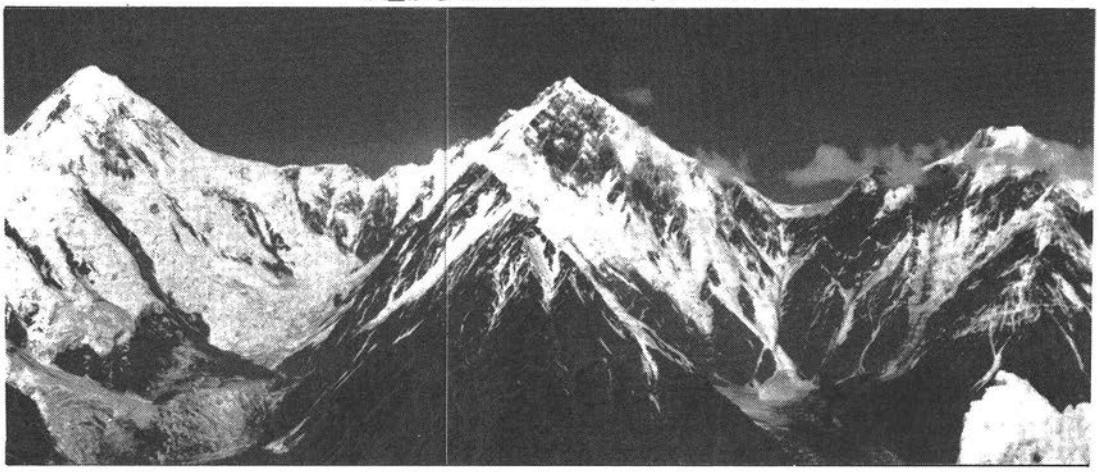
8月1日、天候は下り坂だが、C•1のテントを撤収し、今日中にC•2を作ろうと勇んで出発する。だが荷上はつらくピッチは上がらない。稜線直下の例の壁は、若い3人をけしかけるとようやく中原がトップで登り出した。夕方、全員コルへ上る。コルからはマラングッティ・サールの頂上やディスタギル・サールの眺めを期待していたか、両方ともガスの中だった。しかし脚下には地図にない未知の氷河が、純白で幻想的な姿を横たえていた。

コルはやせていてテントが張れず、さらに1ピッチ上った。急斜面の氷を2時間もけずってテントを張りC•2（6,200m）とした。村中とニマが壁の下のデポを回収して戻ってきたのは、9時過ぎだった。全員疲労と高度の影響で食欲がなく、お茶とようかんのみで、早々にシュラーフにもぐり込む。

2日、雪。今日はスノー・ドームまで登った後、A.BCへ下る予定だったが、天候が悪化し誰も登らない。雪が降る中、1時頃からA.BCへ向けて下り出した。雪が不安定で、C•1まではほとんどスタッカットで下る。6時前にA.BC着。トランシーバーの故障で3日間音信不通だった為、石切さんが心配しながら待っていた。

3～8日。連日、雨や小雪が降ったり止んだり。2日の日を入れると7日間もの悪天だった。登山期間は刻々となくなってゆく。だがあせらない。あせらない。7日午後、村中とニマが食料や装備の補給の為一担BCへ下り、翌日昼頃帰って来た。

▼左からモムヒル・サール、ルプガル・サール、デュット・サール



アタック

8月9日、一週間に渡る悪天も去り　久し振りにトリボールやモムヒル・サールが朝日に輝いている。今日からいよいよアタックに出掛けられると思うと、出発の準備にも活気がある。

8時20分出発。石切さんもC1まで同行する。途中デポ地でアイゼンをつける。皆、勢いよく登り出したものの、久し振りの行動の為か、昨夜の寝不足の為かペースが上がらない。さらには強い日差しが回りの雪面に反射し、焦熱地獄だった。石切さんは頭痛、中原は下痢の腹をかかえて、夕方C1へ入った。

10日、石切さんのみA.BCへ下る。昨日のベタ雪と焦熱地獄に懲りて、今日は少し早目に出発する。クラストしていて登りやすい。第三ステップ附近のクレバス帯は大方雪崩で埋まっていた。第四ステップや最後の雪壁のフィックス・ロープを堀り出しながら、2時頃南西稜上のC•2に着く。稜線からはディスタギル・サールが、北に倒れんばかりの不安定な三角錐となって天を突いているのが眺められた。南西稜の奥にはマラングッティ・サールの頂上らしい雪のピークも見える。天候が今一つはっきりしないのが気がかりだ。

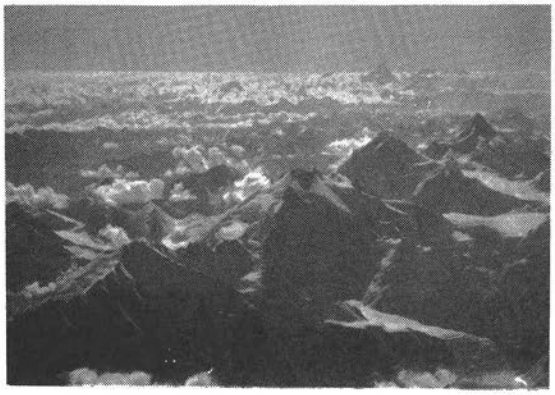
11日、晴れのち小雪。ここから先は未知のルート。今日は最終キャンプ（C•3）を作って、明日のアタックにそなえなければならない。

氷の上に乗った軟雪にアイゼンをとられ、気が抜けない登りだ。最初の岩場は南面を捲いた。スノー・ドームは登るにしたがって傾斜がきつくなってきた。昼頃から天候がくずれ、ガスに包まれた。こんなはずではない、一昨日から4～5日間は晴れる予想なのだが……。下から見あけると丸い雪のピークと思っていたスノー・ドームは、北面に大きな雪庇を張り出したナイフ・エッジの一角にすぎなかった。ルートは終始、ナイフ・エッジの南側急斜面をトラバースぎみに進む。ガスでルートが見えなくなった。6,500m附近に小さなコルがあり、予定より大部低いがC•3（6,500m）とした。明日の天候は回復するだろうか……。

8月12日、朝夕晴、午後小雪。アタックの朝がやってきた。4時45分出発。昨日よりルートは易しそうだ。雪庇が続き、リッジ上に上がれないので、いまだに頂上は確定できない。だが、とりあえず目の前のルートだけでも見えるので、昨日よりはずっと気が楽だ。回りの7,000m峰は頂上附近が雲に包まれ、天候はじきに崩れる事を物語っている。

ラッセルが続く。三角山を過ぎると雪原に近い大きなコルに出た。つぎの登り口には小さなクレバスがあった。表面が軟雪に被われたクレバスは口が小さくても、奥がどれほど広いか解らず案外危険だ。スタッカットで慎重に越えた。雪は膝までもぐり、若い3人が交代でひたすらラッセルに励むが、頂上はなかなか近ずかない。私は登高ペースが落ちたので休憩時間に20分ほど眠り込むと、スッキリした気分になった。天候はどんどん悪化している。視界のきくうちに頂上に立ちたいと先

▼空からのヒスパー山群、左手前がマラングッティ・サール



を急いだが、11時すぎにとうとうガスに包まれた。頂上までは高度差であと200mほどだろうか。ラッセルはさらに深く、腰までもぐる。最後はニマが頑張った。

12時50分、白乳色のガスの中に露岩が幾つか現われ。南西稜と南東稜が交わったピークにたどり着いた。はたしてここが頂上だろうか。ガスに捲かれる前に南東稜上には、ここより高いピークがないことは確認している。一応このピークを頂上として、小雪の吹きつける中で写真など撮っていると、ガスの切れ目から北側に別のピークが見え隠れした。どうもこちらより高そうなので、仕方なく腰を上げる。最初ゆるやかな斜面を一歩一歩下ったが、そのうちナイフ・エッジになった。東側は20mほど垂直に切れ落ち、西側もかなりの傾斜だ。ガスで回りが見えないので凄味を増している。ニマは怖いから帰ろうというが、ここで帰る訳にはいかない。彼に確保させ、ナイフ・エッジに馬乗りになって下る。足元が定まらず登りよりずっと不安定だ。両膝でリッジをはさむようにしてジリ、ジリ下り、小さなコルに降り立った。村中がさらに1ピッチ登るとピークの直下に着いた。荷上やラッセルで大活躍したニマを最初に頂上に立たせた。15時25分登頂。頂上は人が1人ようやく立てるだけの狭い頂きだった。ガスの間から透かして見るとここから北へはグッと落ち込み、これこそ本当の頂上らしかった。各自代る代る頂上に立ち、ガスで視界がないので、どこで撮ったか解らないような写真を撮り合った。

ほとんど休む間もなく引き返し、南峰に登り返したのは16時05分。小休止の後、いよいよ頂上に別れをつげた。30分ほど下ると、なんとガスが切れだし、薄日も差してきた。ガスの間からトリボールやモムヒル・サールが再び顔を出し、ついには雲海上にクンヤン・チッシュも姿を現わした。

各自、誰さそうこともなく、雪のテラスに座り込み、満ち足りた気持ちで、いつまでも夕陽を浴びていた。

お わ り に

2ケ月たらずの山旅は、またたく間に終わった。今回は実力不足のメンバーがそろい、今にもこわれそうな玉子をそっと頂上まで運んだようなものだ。普段の活動はできるだけセーブして体力、気力を温存するやり方が、成功の主因だろう。しかしこんな消極的なやり方は苦肉の策というべきで結果として、面白くもなんともない登山になった。やはり自分の持てる力を精一杯ぶつけ、体力、技術力、知力を尽して頂上をものにする登山こそ正道だろう。

ヒマラヤ登山には性格的に攻撃型と守備型の2つの型の人間が必要だ。今回は攻撃型の人間がいなかったので、易しいルートにもかかわらず、ルート工作が今一つスムーズではなかった。それでもこのメンバーで無事登山を終えられただけでなく、登攀隊員全員が初登頂をものに出来たのはなんという幸運だったのだろう。

帰路の飛行機から、カラコルムの山々が見渡せた。マラングッティ・サールは氷河から見上げるよりもずっと形のいい山だった。あれならもっと一所懸命やればよかったなどと不孫なことを思った。それでも自分達が登ったルートを目でたどると、その時々の場面がよみがえってきて心が踊った。頂上附近におわすであろう幸運の女神に感謝を込めつつ、心の中で手を振り続けた。

マラングッティ・サールの標高は7,200m もなさそうだ。高度計から推測して、おおよそ7,100mを越えた位ではなかろうか。

（杉本記）

1985年パキスタン登山隊の結果

山　　名	高度	国（隊）名	隊　長　名	隊員数	結　果
＜スカルド地区＞					
1. K 2（南東稜）	8, 611	スイス	Erhard Loretan	7	○ 6/中, 7/6
2. 〃（〃）	〃	ポーランド	Wojciech Kurtyka	4	×
3. 〃（〃）	〃	HAJ	飛田和夫	16	○ 7/24
4. 〃（〃）	〃	フランス	Jean Pierre Fresa	4	○ 7/6
5. ブロード・ピーク	8, 047	カナダ	Daniel George Griffith	4	×
6. 〃	〃	スイス	Mrs. Ruth Steinmann	8	×
7. 〃	〃	関西カラコルム隊	賀集信	10	○ 8/12
8. 〃	〃	フランス	Maurice Barrard	4	×
9. 〃	〃	ポーランド	Mrs. RutKiewicz Wanda	4	×
10. ガッシャーブルムⅠ峰	8, 068	イタリア	Agostino DA Polenza	15	○ 6/9
11. 〃	〃	フランス	Suchet Dominique	4	○ 6/中
12. 〃	〃	スイス	Fredy Graf	22	×
13. 〃	〃	横浜蝸牛山岳会隊	松本正城	4	中止
14. 〃	〃	イタリア	Enrico De Luca	5	○
15. 〃	〃	〃	Renato Casarotto	5	×
16. 〃	〃	アメリカ	Robert Allan Wilson	8	×
17. ガッシャーブルムⅡ峰	8, 035	イタリア	Agostino DA Polenza	15	○ 6/6, 6/19
18. 〃	〃	フランス	Suchet Dominique	4	○ 6/中
19. 〃	〃	横浜蝸牛山岳会隊	松本正城	4	○ 7/16, 7/28
20. 〃	〃	イタリア	Renato Casarotto	5	○ 7/11
21. 〃	〃	フランス	Michel Vincent	20	○ 7/11
22. 〃	〃	スエーデン	Peter Weng	8	○ 7/31
23. 〃	〃	フランス	Thierry Renard	4	○ 7/31
24. 〃	〃	フランス	Louis Le Pivain	5	○ 7/8
25. 〃	〃	フランス	Benoit Renard	7	○ 8/2
26. 〃	〃	イタリア	Zanotti Augusto	14	×
27. ガッシャーブルムⅢ峰	7, 925	イギリス	G. R. Cohen	4	×
28. ガッシャーブルムⅣ峰	7, 980	ポーランド	Wojciech Kurtyka	4	○ 7/20西壁
29. ガッシャーブルムⅥ峰	7, 003	イタリア	Miss Maria Luisa Ercalani	4	○ ?
30. シア・カンリ	7, 422	スイス	Fredy Graf	22	○
31. 〃	〃	イタリア	Renato Casarotto	5	×
32. ラトックⅡ峰	7, 108	登攀倶楽部京都隊	山崎豊正	4	×
33. ラトックⅢ峰	6, 946	ポーランド	Henryk Kubis	10	×
34. オーガⅡ峰	6, 960	アメリカ	Robert Kinght	6	×
35. ボビスギール	6, 416	日大理工学部山稜会隊	谷川幸利	4	◎ 7/7
36. マッシャーブルム	7, 821	関西カラコルム隊	賀集信	10	○ 7/23

山　　名	高度	国（隊）名	隊　長　名	隊員数	結　果
37. マッシャーブルム	7, 821	イギリス	Mike Searle	9	×
38.　〃	〃	オーストリア	Robert Renzler	6	○ 7/24
＜ギルギット地区＞					
39. ディラン	7, 825	スペイン	Angel Serra Jubany	8	×
40.　〃	〃	イギリス	Doug Scoot	15	○
41.　〃	〃	オーストリア	Gerd Pressl	6	○
42. カンジュット・サールI	7, 760	スイス	Anton Spiring	5	×
43.　〃　II	6, 831	〃	〃	〃	○
44. パスー・ピーク	7, 284	福岡登高会隊	新　貝　勲	8	○ 7/14 7/12 2峰
45. マラングッティ・サール	7, 200	東京志岳会隊	杉　本　忠　男	5	◎ 8/12
46. ラカポシ東峰	6, 900	オーストリア	Eduard Koblmuller	7	○
47. ラカポシ	7, 788	イギリス	Doug Scoot	15	×
48. ウルタル・サール	7, 388	ポーランド	Jerzy Tillak	16	×
＜ディアミール地区＞					
49. ナンガパルバット南西稜	8, 125	アメリカ	Anthony Scott Lewis	6	×
50.　〃　南東稜	〃	ポーランド	Pawel Mularz	16	○ 7/13
51.　〃　西　面	〃	福岡大学隊	植　松　満　男	14	○ 7/8
52.　〃　西　面	〃	スイス	Stefan Worner	10	×
53.　〃　西　面	〃	オーストリア	Peter Habler	5	○ 7/12
54.　〃　西　面	〃	ポーランド	Mrs. Rutkiewicz Wanda	7	○ 7/15
55.　〃　北東稜	〃	札幌山岳会隊	清　水　一　行	8	×
56.　〃　南西稜	〃	福岡登高会隊	新　貝　勲	8	×
57.　〃　西　面	〃	イェティ同人	遠　藤　晴　行	4	×
58.　〃　南　面	〃	ユーゴスラビア	Skok Janez	7	×
59.　〃　〃	〃	スペイン	Alberto Garcia Astudillo	3	×
60.　〃　南西稜	〃	イギリス	Doug Scoot	15	×
＜チトラル地区＞					
61. ディル・ゴル・ゾム	6, 778	イタリア	Giavanni Calcogno	22	○ 8/6, 8.10
62. ティリチ・ミールWIV	7, 338	オランダ	Gerard C. Van Sprang	4	×

1985年パキスタン登山隊遭難事故

山　　名	高度	国　　名	事故日	遭　難　事　故
K 2	8, 611	フランス隊	7/7	Lacroix Daniel が登頂後、8,400m付近で滑落死亡
ガッシャーブルムII峰	8, 035	〃	7/12	Jean P. Vouyges が7,000mで高山病で死亡
〃	〃	〃	6/24	中野融が、6,500m付近で雪崩に巻きこまれて転落
ガッシャーブルムVI峰	7, 003	イタリア隊	5/9	ポーターが、チャッポの近くの橋からシガール川へ転落
ブロード・ピーク	8, 047	ポ・ス・フ・パ合同隊	8/20	Miss K. Barbara が、氷河からの川を横断中に転落死
ラカポシ北稜	6, 900	オーストリア隊	8/2	G. Fellner が、BCに下降中、落石を受けて死亡
ナンガパルバット南東稜	8, 125	ポーランド隊	7/10	K. Pioter が、C1～C2間で雪崩に襲われて死亡
ディル・ゴル・ゾム	6, 778	イタリア隊	8/10	E. Fontanive が、登頂後、C2で心臓疾患のため死亡

■寸　感■

東京が大雪に見舞われた朝、家の前を除雪するのに困ってしまった。引越して間もない我が家には、スコップもなければ、竹箒も無いのである。しかたがないので、娘と二人で雪だるまを作って除雪した。

備えあれば憂い無し、とは良く云われることであるが、日頃使わないものを事前に備えておくと云うことは仲々出来ないものである。

ヒマラヤでもよく土地の古老の話しにでは○○年振りの大雪だった。と云うのが聞かれるが、そうした悪天に遭遇した不運を嘆くよりも、その前にそう云うことが起りうることを念頭において計画をたて出発すべきではなかろうか。

事務局日誌（2月）

1日（土）～2日（日）　キンナール女子隊打合わせ

12日（水）　ソウル山岳連盟・趙相泰理事来局
外務省へCMA代表団のビザ申請

13日（木）　キンナール女子隊打合わせ

14日（金）　ヒマラヤNo.172発送

18日（火）　事務局打合わせ（稲田、山森）

22日（土）～23日（日）　日山協海外登山技術研究会（八王子大学セミナー・山森、尾形、吉田）

24日（月）　東京集会（12名）

27日（木）　CMA代表団（鄭団長以下4名）来日（成田出迎え・山森、吉田）

28日（金）　CMA代表団歓迎会

ヒマラヤNo.173（4月号）

昭和61年3月10日印刷　61年4月1日発行

発行人　柴田　金之助
編集人　尾形　好雄
発行所　日本ヒマラヤ協会
〒160　東京都新宿区高田馬場3－23－1
淀橋食糧ビル506号

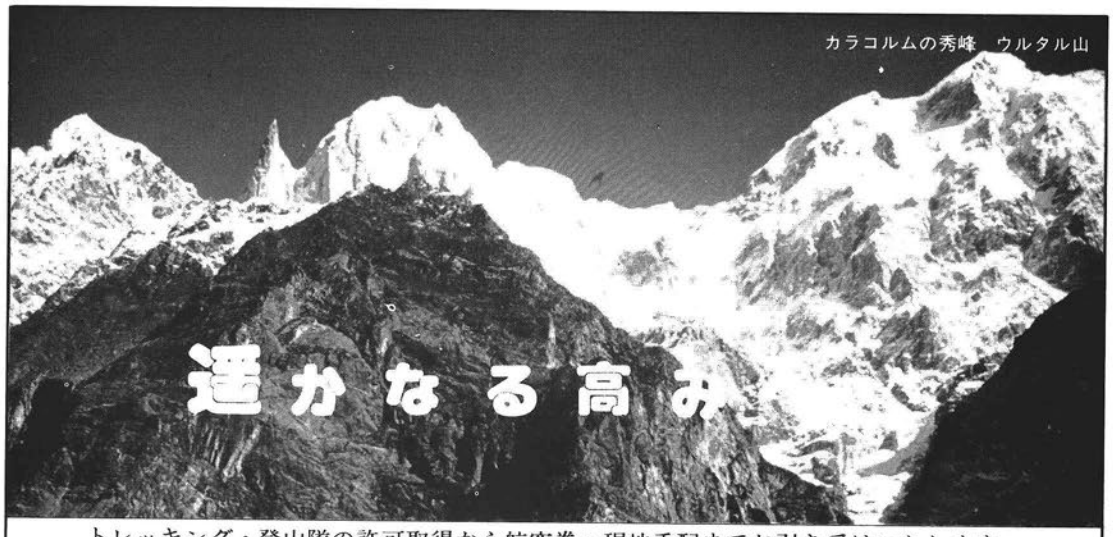
郵便振替　東京0-48954「日本ヒマラヤ協会」

TREASURE TOUR

自分の旅だから、自分でつくる。そんなあなたを応援いたします。

——遠征隊、トレッキング、秘境への旅——
あらゆる申請・許可取得、現地手配、航空券、山岳保険など、
お客様のご要望に遠征経験豊富なスタッフがお答えします。

マウンテントラベル株式会社
〒105 東京都港区新橋3-26-3 会計ビル4F
☎03-574-8880
三井航空サービス代理店2452号



トレッキング・登山隊の許可取得から航空券・現地手配までお引き受けいたします。
～ネパール・インド・ブータン・パキスタン・東南アジア・アフリカ・南米～

トレッキング・海外登山
シルクロード・秘境旅行
のパイオニア

株式会社 西遊旅行

東京本社　〒101 東京都千代田区神田神保町２－２　新世界ビル５階　☎03(237)1391(代表)
大阪営業所〒541 大阪市東区平野町4-53-3ニューライフ平野町202号室 ☎06(202)1391(代表)
カトマンズ営業所　JAI HIMAL TREKKING (P) Ltd. P. O. BOX 3017
KATHMANDU. NEPAL ☎216338
運輸大臣登録一般旅行業６０７号

ヒマラヤへの装備

◎遠征隊の装備、相談にのります。

ICI 石井スポーツ

- 登山本店／〒160東京都新宿区百人町2丁目2番3号☎03(208)6601～3
- 大宮店／〒330埼玉県大宮市宮町2丁目123番地☎0486(41)5707
- 水道橋登山店／〒101東京都千代田区三崎町2丁目8番14号☎03(264)5575～6
- 神田登山店／〒101東京都千代田区神田神保町1丁目8番地☎03(295)0622
- 新宿西口店／〒160東京都新宿区新宿1丁目16番7号☎03(346)0301(代)
- 高崎店／〒370群馬県高崎市新町6番地☎0273(27)2397(代)
- 札幌登山店／〒060北海道札幌市中央区南二条西4丁目4番☎011(222)5305
- 新潟店／〒950新潟県新潟市東大通2丁目5番1号☎0252(43)6330
- 仙台店／〒980宮城県仙台市東八番丁107番地の36号☎0222(97)2442
- 町田ジョルナ店／〒194東京都町田市原町田6丁目6番地14号☎0427(26)6248(代)
- フーズショップ／〒160東京都新宿区百人町2丁目2番43号☎03(232)1286
- 外商部／〒160東京都新宿区大久保2丁目19番10号☎03(200)7219
- 事務所／〒160東京都新宿区百人町1丁目4番15号☎03(200)1004